岩崎革也　宛書簡　三 萩 堺利彦

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>山泉 進</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>キリスト教社会問題研究</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
| 権利       | 同志社大学人文科学研究所  
キリスト教社会問題研究会 |
| 提供       | 同志社大学大学院文学研究科文学専攻文学博士課程後期
修士課程修了者及び出席者編
岩崎革也宛書簡（三）

史料

注記

「一九三三」に宛てた、初期社会主義者たちの書簡のうち塩利彦（一八七七─一九三三）からのもの一部である。すでに、田中真人先生と共同で紹介してきた幸徳秋水をはじめとした社会主義者の書簡（本誌第五四号、第五五号掲載の続き）について、第五四号掲載の田中先生の『解題』に述べられているので、ご参照願いたい。

山見

進

田中先生の去世後、私たちは、同志社大学人文科学研究所内に研究会を組織され、私もその研究員の一人として参加させていただきながら、十分にその期待に応えられなかったことをただ後悔することしかできないが、今後の自分の仕事のなかで少しでも田中先生の「志」に応えられるようにしていきたいと考えている。
中先生と、何事にも良い加減であった私とでは、随分とご迷惑をかけすることが多かったと思う。ひたすらご冥福をお祈りしたい。

堺利彦書簡 その一

（一）一九〇四（明治三七）年一月一日付（葉書）
　頒賀新年

（二）一九〇四（明治三七）年二月一日付（封書）

電話本局三二六一番

（差出）東京都新宿区有楽町三丁目一番地

（宛先）丹波須知町

石崎記也様

（住所部分はスタンプ）

平民社

電話本局三二六一番

（住所部分はスタンプ）

一金、四円九拾五錢
　一台銭
　一台銭
　一台銭
　一台銭
　一台銭
　一台銭
　一台銭
　一台銭
　一台銭

右之通りに候也

同様、右第十三号（来月七月一日）に御返り可致候や伺候

二月一日

二月一日
毎毎御懸念に預り恐縮に存します。向にかく無事出倉じたし
はかから又来るかの働きは致します。御上京の時節を
生憎留守にて御面会の機を得ざるは非常の遺憾に存じま
す。秋水より承れば平民社の財政につき一方で御配慮下され
たるよし、お陰にて苦ししげ所を一処に致しました。何分にも此
戦争中を持ちへねばならず、戦争が終れば何れにしても
チラのものと存じます、此上ながら御助勢を願ひおきます。
秋水の病気も大がいに回復いたしました。然しまた衰弱が烈し
ので此度は至って申上げておきます。いづれ又中ゆるく申上
ぐる心得であります、勿々頓首

（７）一九〇四
明治三七年
〔封書〕
岩崎謙也様

（８）一九〇五
明治三八年
〔封書〕
岩崎謙也様

（九）一九〇五
明治三八年
二月十三日着
〔葉書〕
東京平民社
岩崎謙也様

（未出）
川村謙也様

（未出）
東京都市民社

（未出）
坂利彦

（未出）
京都府立病院北室

（未出）
岩崎謙也様

平民政同人

○手紙背見致候、御病気御療養中のし、折角御注意専一に
存候、日下、京都府には六名の直接購読者有り、別に便利室

途中に寄居して平和なる雑談に時を過し、云ふべからざる愉快を感じ
ました。
岩崎革也宛書簡（三）

【既出】
東京有楽町平民社

〔九四〕
【差出】
京都府立病院

〔九四五〕
【宛先】
京都府立病院北室

岩崎革也様

〔三月卅一日〕
秋月君座下

幸徳西川三氏は去百八日経て旅行致しました。留守の大任を
小生に負ひけるかと心配いたして居ります。然し未下君が
分に助けて呉れる筈ですから先々御安心を乞ふ

（追って書き）

御健康近況如何。折詰御自愛祈りあげます

平民政留守の大任を負ひ、不肖の身に果して其責を完う所
大過なくや終て参りました。未下兵衛君他の助力に対し深
く感謝せねばなりません。此上も小生の全労と誠心とを
以て、やれる丈はやって行きます。先々御安心を願って置きま
す

全国に散在する同志が、未だ十分に表面の運動は為し得ませ
ぬが、隠然我々に深き同情を寄せ、鬱勃として時の至るかなら
有様を見なされ、弱き小生等も其希望に導かれ、更に発懐するの
力を見じます

小生は幸ひに身体健全、多少の勤務に堪へ得ると信じます、
只切に貴下の静養を祈る。勿々郵首

彥
（12）一九〇五
（明治三八）年四月二十三日付
【宛先】京都室町高下去
【岩崎也様】
【差出】平民社（印）
【堺利彦】

巻方にて両兄も御心配下さるご事は無事、思ひます
秋水、病室に移されて却つて便宜を得て居るかと思ひます
特に一日二、三個と申せられて居る申し、せめたる事
に存じます
明日は共産党宣言の公判の二、三兄とも出廷の事とは思ひます
が、若し秋水兄出廷なき時は又々延期を申請する積りであります
す、幸雄家留守宅にても皆々無事に置いて居られます
其中又申上げます、勿々顔首
彦

四月廿三日
岩崎老兄

（13）一九〇五
（明治三八）年五月十四日付
【宛先】丹波國須知町
【岩崎也様】
【差出】東京有楽町平民社
【堺利彦】

秋水の身上につきいろく御心遣い諸々
帰来の日はいづれ彼は御相談申し上げる事存じます

（14）一九〇五
（明治三八）年六月十四日付
【宛先】丹波國須知町
【岩崎也様】
【差出】東京有楽町平民社
【堺利彦】

近来御健康いか、秋水も大分此頃は善いそうです、尤も梅
雨中又多少の軽災りがせねばよいと案じて居ります、社中も
鬼にかくヤツて居ります、幸雄家留守宅も無事にして居ります
先々何も御安否を乞
況

六月十四日

（15）一九〇五
（明治三八）年七月十五日付
【宛先】丹波國須知町
【岩崎也様】
【差出】東京有楽町平民社
【堺利彦】
岩崎郎也宛書簡（三）

暑中如何御暑しや、秋水の帰来も最早程なき事と相成りましょう。先日会に参り兼の貴发の御厚意を承へて置きまして、先にかたく帰来の上は一二次月静養の必要があると存じます、と申して病院は再度の入院の心地がするで本人もヒドかいかなる様子ですかから、病院でなく、自宅なり其他適當の処にて自由にさせて存じます、イツの事一二次月の後米国にでも行って暫く遊んで見ようかなどと云って居りました。

十五日
岩崎君

〔追伸〕
小生は昨日より小闇を起こんで静岡に参って居ります、久しぶりに居子を見るのが為に、いや之を申上げます、勿々彦

〔差出〕
東京麹町区元町一丁目廿七
堺利彦

（追伸）
岩崎兄

〔差出〕
明治三年年九月四日付（封書）
（宛先）丹波国須知町
岩崎郎也様

其後御病勢如何、折角御書に申して居ります、秋水も追々回復いたし、此分にては今月中には一とほり全快いたすかと思はれます、彼れの米国行の事に就ては御不安の感もあらせられ、よやく何故に居りますが、安外漫遊も亦一良策かと考え、行を為し、開展を為さんには、安外漫遊も亦一良策かと考え、成して居る次第であります、平民社の事も（直言）にて御承知下さる通り、先々一つ形づけましたので、大した心配もあるまいかと存じ申れます、就ては秋水の外遊に御紛成を願ひたく、猶は此上ながらに申上かます、彼れの旅費の一部御助け下さる事が出来ますなら、小生も共に深く感謝いたす次第であります。御病中に色々面倒の事共申上げて相応まぬ次第ながら、よろしく御有変わ願上げます、勿々頓首

下候

堺利彦

〔追伸〕
岩崎兄

猶は小生身上に就ては直言紙上にて委細御承知を願ひます。
新年の御祝詞申上げます

近年トントと無能江戸実在を乞ふ、生年未も此地に滞在、
少々著述に取か、つて居ります、運動上の事は不光にして御承
知を乞ふ。

其内いろく申上げたいと存じます

岩崎兄

（18） 水明治30年

岩崎兄弟

（差出） 丹波国須知町

（宛先） 岩崎兄弟

（差出） 東京麹町区元町一丁目一八

（宛先） 丹波国須知町

堺利彦

間の町ノ三ノ、延岡方

堺利彦

其後如何御通しにや、此地にて是徒聚集中事で大ぶん混雑
して居ります、いよいよ公判に移されたので駄りかく長引き事
と存ぜられます、

それにつき一番困るのは金です、調書の書写だけでも百円も掛
るとの事です、其外、差入、留宅の見舞など大ぶんか、りま

（17） 一九〇六

（差出） 丹波国須知町

（宛先） 岩崎兄弟

（差出） 金沢市九人橋下通り

（宛先） 岩崎兄弟

堺利彦

十六日

岩崎兄

（差出） 丹波国須知町

（宛先） 岩崎兄弟

（差出） 東京麹町区元町一丁目一八

（宛先） 丹波国須知町

堺利彦

間の町ノ三ノ、延岡方

堺利彦

其後如何御通しにや、此地にて是徒聚集中事で大ぶん混雑
して居ります、いよいよ公判に移されたので駄りかく長引き事
と存ぜられます、